

国木田独歩の佐伯での生活

(九)

山内武麒麟

(賛助会員・佐伯市城下東町)

十七日の記

月明かなり。

昨日午後収二と共に城山に登る。これより先き十二日午後学校生等と共に登る、城山の頂に城跡あり。城跡只石垣を残すのみ。残墟累々秋草と灌木と蔓草と松風と紅葉と相交錯紛々たるを見る也。
と、城山頂上の荒涼とした様子を記して、次にその感想を述べている。

自然は人間の歴史を顧みない。たゞしたいままにする。人間はその間に生死し浮き沈みするのである。

今日午後また収二と共に城山に登って植物採集をした。昨日収二から藤形夫婦についての話、山縣夫婦の話、また神田の老婆とその嫁との間についての話を聞いた。

この事実はどうなるのだろう。

天の星、月、雲、光、地の草、木、花、石、風、人間の歴史、生活、性質、境遇、関係、情、生死、慾、恨、恋、不幸災厄、幸運榮達

などこれらの事実、人はたゞその錯綜し混乱している事実の中に盲目的に起居しているのに過ぎないものであるのか。

と、色々な事実には避けることが出来ない深い因縁で結ばれているものがある、と述べてある。

二十日の記には

二十日と称すと雖も已に十二時夜半の鐘は打ちぬ。吾今坐して此記を書く可し。窓外の夕光將に寂莫をた

すけつゝ在るなり。

と書き出して次に十八日から泊りがけで第二回目の尺間登山をした記を記してある。

十八日は土曜日なりき。午後二時過ぎ、学校より帰りて弟を伴ひ直ちに尺間山に向て発す。

と、ある。この登山は前もって計画をたて、山上で一泊することにしていたのである。

天気は近日好天気続きで、白雲、秋空、紅葉、夕陽は毎日美しかった。この日もまた上天気であった。尺間山に登るのには二つの道がある。一つは床木村から急な坂道より登ると、一つは植松の愛宕神社の後から山の尾根伝いに登る道とである。独歩兄弟は以前床木の方から登ったので今度は尾根伝いに登った。尺間山の頂上に行きつかぬうちに日は早くも暮れかゝり、空の色はうす暗くなるのにつれて青くなり深く遠くなって、月の光が冷やかに照しはじめた。

夕陽の美を山脈の頂を道すがら眺めて真に自然の一なるを感ず。未だ母たるを感ずる能はず。と、その光景を眺めての感想を記してある。

山頂には登山者を泊める家が二三軒ある。勿論みなふ

すぼった草ぶきの家であるが、尺間神社の信者はこの家に籠るのである。われわれ兄弟もその一軒に宿った。宿には片眼を失った三十五六歳ばかりの女と、他に十三四の少女がいた。たゞこの二人だけであった。

われわれは炬を囲んで座り、焰々と燃えあがる焚火にあたりながら持参したむすびを食べた。

そして食べ終ると外に出て見た。

月を巖頭に眺む。望むで極まる処を知らず。下界ただ見る朦朧たり。而して天上明月のあるあり。身只だ自然の中に在るを感ず。

と、山上の岩の上から美しい秋の月を仰ぎながら壮大無辺な光景を眺めている。この景色を眺望したいために一泊することを考えて登ったのである。嘸かし独歩はこの光景に接し心から満足したことであろう。

二十一日の記には（昨夜の記の続き）と見出しをつけ、尺間登山の続きを記してある。

其夜は此茅屋に眠る。かゝる家に眠りたるはこれが始めなり。

此の家の婦、其命運、其迷信、之れ吾に取りて大な

る事実なり。小女は又た尺間社に籠るため送られて在る者の由。

と、ある。このあばらやに一泊したのである。その家の婦人を観察した感想を記してある。

十九日の早朝は海面から登る日の出を拝している。そして「其の美未だ見ざる処の者なり」と美しさに驚いている。

この朝山上で武石君（学館生徒）と一しょになり三人で、この尺間山から彦岳の方へ廻って行って登り、一日中山から山へと跋渉して、彦岳から霞ヶ浦に降りて帰宅している。

そして観察したことについての感想を記してある。

一の鳥井の一軒屋、其住人、此の事実は面白き意味を含む。

と、自然と人の生活の実際とを自分はより深く観察したいと欲している。事実である。人生の事実を見よ。この空の下地の上で人間が暮しつゝある実際の事実を見よ。そして自然をよく見よ。

と、観察の態度を示している。

武石は名を素吉と云い、後に陸軍々医となり、退役後、

大手前の自宅で医師として開業していた。

この記を読んで驚くのは独歩兄弟の健脚ぶりである。

午後から尺間山に登り山上に一泊し、翌日は彦岳に登って霞ヶ浦に下り、そこからまたてくてくと二つの坂を越して帰宅している。この行程は十里近くあるのではあるまいか。それが平地を歩くのではなく、山から山へと山越しを繰り返しながら高い山に登っている。尺間山から彦岳へ登ったのにどの道をどう通って登ったのかよく解らないが、尾根から尾根へと道も禄にない処を掻き分けながら進んだのではあるまいか。現在のようにバスや車を利用することのなかったこの当時は、たゞてくてくと歩く外はなかったのである。

独歩兄弟は日曜、祭日の休日には殆んど遠行を計画し、山野を跋渉して自然の美を探勝し、人々の生活を観察していた。しかし独歩は自然の中に没入し沈溺しなかった。自然と人間との生活をより深く観察しその調和を見出すことにとつとめ、そこに高い詩想を育てゝいたのである。

当時の独歩の出で立ちには木綿袴に編上靴、無論遠行の時は草鞋脚肝いを履きステッキを持って、小男であったので、ちょこちょこ歩いていたらと云うことである。

この尺間登山のことを友人の大久保余所五郎に十一月二十五日付けで、また田村三治に二十七日付けで報らせてある。殊に田村宛にはこのことを詳しく書いて、登山記のようである。原文のまゝ記載する。

(前文を略す)

実は近来甚だ遠行すきと相成(もとからすきの上に)日曜日毎に大概欠かさず歩きちらすこと実に面白く候十一月十八日はあたかも土曜日、此日は校務三時までなりしを生徒にことわり二時迄で致し、二時過ぎ帰宅し弟と共に直ちに立出仕候 指して行く先き何処ぞやと問ひ給へ御答へ申さん。尺間山と申す山にて候 抑も此山は嘗て一度び小生等登山したる事ありて其模様は大兄にも通知致したりと記憶す。此度は其山頂に一泊の覚悟にて兼て用意の三度分のむすび二人前を荷ひ毛氈二枚を用意仕候 麗かにてる秋の光をすこし斜に受け愉々快々言ふに言はれぬ心持を水素と致し、身体を一種の精神的軽気球と仕り浮く如く飛ぶが如く歩行致し候 さすがの軽気球も山の麓にかゝりては余り浮き浮き登ること能はず、兩人共毛氈やら兵糧やら寒さ用意の衣類やら大分の荷物を担ふ故 水素瓦斯甚だ足

らず 青いきといき五色の息とやら申す近松翁直伝のいきに猶二色加へて七色の虹霓(にじい)日頃胸間に横はる所の)はき、休みて登り、登りては又休み 杉の薄暗き森、カシ、ハシバミの灌木の林など山の腰をめぐる処を漸ふ漸ふ通り過ぎ初めて四面の風景を見下す処に達し候 此時已に夕陽西に傾き遠山の頂火花を点じ、西の方阿蘇の煙りか將た雲か悠々たる紫暝の色 人をして一種のめらんこりを覚えしめ候

こゝに一つのエピソードあり、吾等猶ほ此の処に達せずして森、林の間を登りし時或処に憩ひ候 此の処は此の以前登山の節の帰路一箇の老樵夫と一少年とに出遇ふたる処にて 其の老樵夫の如何にも衰へたる之を導く少年の如何にも無邪氣らしき事は小生の頭底固く印して失せず、其後も常に尺間山を思へば必ず聯想致す場処に候 吾等又此処に憩ひ汗を拭き用意の蜜柑を食ひ彼れを語りこれ語り耳を澄して鳥の声をきくなど 暫時休憩致し又歩み出し候。

登りて凡そ十数分も経過したらんと思ふ時取二をやと申し候間何ぞと問へば、帽子がない!と呼ぶ。どうした!と小生あたりを見廻はせどもなし。サアどうしよ

うか。屹度先きに憩ひなる処に忘れたるなり。馬鹿の事してけりと嘆息しても帽子は独りで追駈け来る程の忠義心なし。最早大分登りたる後ゆる取り返へしに降る勇氣甚だ少なし、然るに抑も此の帽子は在京の節水谷氏より戴きたる紀念物なり。此冬休みは熊本に旅行して水谷君に出遭ひ再び昔を語りて情趣を掬せん題目の一つは実に此帽子にてあるなり。其のまゝ捨つる時は何となく水谷君を山の中に捨て置く心地して、如何にするも捨つ可からず。収二遂に再び森の中に引き返し漸く拾ひ還り申候。故に今猶は収二の頭上の友と相成り居候。

さて西に夕陽を眺め頭上已に月の光を澄みたる空に戴き、いよいよ登りて遂に尺間の絶頂に達し申候。此時全く夜。月光霜の如く、空裡の寂莫天地に罩めぬ。

抑も尺間山といへば（已に報知したる如く）尺間神社と申す怪しげなる妖神祭あり。絶頂に近き辺は巖石突々として空をきり、社は其てつべん（熊本語）にありて鏈をたよりて登り得る程の絶崖に候。而も不思議にも其の巖石樹木の間二二三軒の茅屋ありて此社に祈願の信徒を宿すなり。我等の宿りたるは則ち其の一つに

候。勿論此二三軒も決して軒を並べたる者にてはなく其間甚だ隔てり。互に巖石樹木を以て限ぎられ相往來するさへ鏈の厄介になる次第故。先づ各々独立の一軒屋に候事と御存知被下度候。

此の一軒家に到着したる時の心地と申してはこゝも都の生活のみに染み給う大兄の如き人々の想像の万分の一だも致し得る者には御座なく候。申し宿を借しますかと障子を明けて頭差入れて問ひしは小生なり。内を見れば室内朦朧として片隅に一個の炉あり。自在かぎに掛けある者は大鍋。其傍に座する者は一個年増の女。一個十三四歳と見ゆる少女。其他此の大寂莫の山頂の物すぎき住家なるに闕らず誰一つの男の影なし。若し此二人が荒くれ男の毛だらけと想像すれば、此あばらやこそ疑もなく山賊の住家とこそ申す可けれ。幸にして大反対の婦女子年若の二人なりしを以て又た一種の異様の感も有之候。

炉を擁して対ふに少女と年増と坐し。此方に収二と坐し。炉は焰々燃え上りて四人の面赤く照らす。

若し室内を見廻せば只だ是れ一間一軒の茅屋に過ぎず。天井なく只だ大木の丸太の横ふを見る。其上には

しごなど投げあげてあり 室内はふすばりて暗胆たる事は物すぎ許りなり 西の一面に奇怪の神柵ありて燈とぼれ居れり 之れ家に祭れる尺間の妖神とこそ思はれ候 東の一面に食器など並べ置く柵あり 炉の一方に二枚屏風の中立ての者立つを見たり それもいたく煤け居たり 凡そこれ木賃宿の體。

年増の齡三十四五 一眼を眇しつゝぼを着し怪しき詭りにて語る 忽ち笑ひ忽ち真面目になる 其のキャラクター容易に知る可からず 少女は臼杵の者由願ほどのきの為め一週間籠り居るとの事 哀れとや申すべき。

吾等此の怪しき屋根の下 此面白き炉火に對し此の二人の婦女と語り 用意のむすびを食して後 屋外に出づれば月光屋の如し 今こそ巖の絶頂に上りて思ふまゝに此の明月に向ひ候 身は只だ天地茫茫の際に漂ふが如く思ひ悠々として窮まる処を知らず 自然に對しては自然の無辺を思ひ 明光に向つては美の無限を思ふ 此際消息は大兄の想像にまかすのみに候 此たびの登山も半ば此明月を此巖頭千尺の高所に眺めたきが願にて之れありしなり。

只だ見る狭霧霜の如く白く下界を罩め 山も野も谷

も其底に眠り男も女も親も子も家族も社会も歴史も恋も恨も慾も何にもかも此の底に包まる 仰ぎ望めば無限無辺無窮の大空悠々として拡がるを見る。星も月も太陽も木星金星銀河ありとあらゆる大魂此の間に充つ光みち暗み満ち凡ての法則みつ 凡て眠り此時神独り醒む ウォーズウォース吾を欺かずと覚え候

此夜は茅屋に眠り 明くれば十九日日曜日 此の日は終日山より山へと跋渉仕り 終に彦岳と称する高山に登り薄暮家に帰り候 時は月の光漸く宵の煙の香に泌めそめし頃にてこれあり候 (以下略)

と、ある。詳細に書いてある。その観察力に驚く外はない。独歩は心から満足したことがはっきり読めとれる。

二十二日の記

自分は今になって始めて哲学者と詩人、論理家と予言者との間に大きな隔たりのあることを知った。自分の経験から徴すると、自然や人生に對する推究がいかに冷淡で血も涙もなく一言で云えば命がない。しかし、

或は明光を見て卒然として感じ、少女の哀歌を聞き暗然として感ずる時は、如何に人生の深玄にして哀痛

幽憂の靈泉を湛ゆるよ。

と、詩人の反応を記し、

それ哀痛幽憂なりと雖も眞の信仰眞の思想はこの中より生ず。

と、宗教学、予言者の反応を記してある。

そして独歩自身の反応を記してある。

悠々たり自然、吾爾を愛し、爾をしたひ爾に哭し爾を恋ふ。爾吾をのせ、又た吾を埋む。嗚呼吾爾が無限無窮の中に在り。美なる哉自然恐ろしき哉自然、爾吾を載せ吾を包む。吾あり爾あり、爾ありて吾あり。

と、心から自然を讚美し、また畏怖している。



楳の木叢書 第九十三篇

賛助会員

歌集 白梅賦 大内須磨子著

著者は中央歌壇に名をなしている閨秀歌人である。佐伯の短歌界を今日のレベルにまで引き上げてくれた恩人であり、あまりにも有名な歌人である。

巻末にある「『白梅賦』に寄す―大内須磨子小論―」を書かれた来島靖生氏の冒頭のことばを借りて、本書の紹介に替えたい。

大内須磨子さんが歌集『花いかだ』を上梓されたのは昭和四十三年のことである。先師窪田空穂は序文で須磨子の歌が初期の頃から「一種の風格を有って」いたことを言い「鮮明な水の流れのごとき歌の続きは、周辺の自然の風物の美しさを限なく写して流れ、また、人事の哀感の微細なものまでも、あやしく写して流れている」―中略―年輪を加えるに従って空穂のいう「風格」は一層ひろがりを見せ、鮮明な水の流れに喩えられた歌は、さまざまな人生の波瀾を経過して一段と陰翳を濃くし、緩急の変化を見せつついまもゆたかに流れている―以下略 東京・雉書房刊 定価三千円